

## 会員の広場



### 巖島神社の再建にかけた佐伯景弘から学ぶ地域おこし

廿日市市文化協会理事 木本 泉

#### はじめに

私が住んでいるのは広島県西部にある廿日市市で、古代から“佐伯”と呼ばれた地である。世界遺産である宮島の対岸で、住み始めてもう40年以上になる。しかし会社人間であった現役のころは、初詣で巖島神社に出かけるくらいで近所の人たちとも繋がりほとんどなく、地域のことを考えることもなかった。9年ほど前、第一線を退いて時間の余裕ができて、これから何をして過ごすかを考えたのだが、幸運にも地域の自治会活動などで仲間が出来て将来の街のありかたなどを話すようになってくる。

そうしているうち、私が歴史に興味をもっていることを知った仲間のひとりが、宮島に絡んだこの地域からの視点で歴史を再構築すれば、若い人を含めた地域の人達の誇りにもなるし、地域のアイデンティティを生むことに繋がるのではないかとアドバイスしてくれた。それまで私が興味を持っていたのは、司馬遼太郎がいろんな土地に出かけて行って、それぞれの土地の歴史を彼独自の史観により分析しているような、その土地に根ざした歴史である。残念ながらわが宮島につながる彼の紀行文を知らない。

この佐伯の地の歴史を学ぼうとしたとき、幸いなことに宮島に関する歴史は広島大学や県立広島大学などで活発に研究され、その成果を大学公開講座などで学ぶことができる。わたしもよく参加させていただいている。さらに地域の伝承などを調べている人もいるし、また現在はインターネットにより必要な情報を自由に得ることから、地方史の学習素材はたくさんある。



巖島神社 宮島観光協会

宮島は日本三景の一つであり、巖島神社の壮麗な社殿については誰でも知っている。ここでは、あの社殿がどのようにしてできたのかを明らかにして、そこから学ぶ地域おこしについて考察してみたい。

#### 1. 巖島神社の佐伯神主家

世界遺産に指定されている巖島神社の社殿は、平清盛によって建てられたことは広く知られている。

今 NHK の大河ドラマでも平清盛が取り上げられ、関係のあった地域がこれを活性化の引き金にしようといろんなイベントなどが計画実施されている。宮島のある廿日市市もそのひとつである。

歴史の教科書にも載っているこの当たり前のことは事実ではあるが、平安京からはるか離れたこの辺鄙な土地に、なぜ当時最もユニークで豪華な海上社殿が建設されたのだろうか。それは清盛が建てるように仕掛けた男がこの地にいたということに他ならない。このことを取り上げて説明してみたい。

佐伯景弘という名前をご存知だろうか。あまり有名とは言いがたいが、厳島神社神主だった彼と彼の父頼信のお陰で現在我々はすばらしい歴史文化遺産を享受できているとっていいのだ。

『日本書紀』によると、厳島神社のある安芸の国に蝦夷が配置されたことから佐伯という地名ができたが、それに絡む一族が佐伯氏である。厳島神社が創建されたのは593年というから飛鳥時代である。祭神は市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命という三人の女神で、これは弥生時代から九州北部を根拠地として大陸との交流を行ってきた宗像一族の守り神である。この宗像が瀬戸内海航路に進出するにあたり安全を祈願して創建したのが厳島神社である。その際この地の佐伯一族の長であった佐伯鞍職が関与して初代の神主になり、爾来、彼の子孫がこの安芸国一の宮の神主を務めてきた。

厳島神社は主人公の登場する平安時代末期にも継承されて存在したが、神社の建物自体も老朽化し武士の世に移り変わる変化の時代に取り残されたような状態だったと思われる。

そのような時、当時武士として急速に勢力を拡大していた伊勢平家の御曹司である平清盛が1146年から10年間、安芸守に就いたのである。これは厳島神社の神主家にとって千載一遇のチャンスであった。当時の厳島神社の神主は父親の佐伯頼信で、佐伯景弘は生年没年は伝わっていないが、私の推定ではまだ幼児か子供だったはずである。いずれにせよこの二人が、厳島神社再建のために一大作戦を展開するのである。

## 2. 清盛への接近

清盛は28歳で安芸守になったが、当時この瀬戸内海沿岸は父の平忠盛の勢力下にあったといっただけでよい。というのは、忠盛は清盛が生まれた2年後に27歳の若さで越前守になっていることから分かるように、武士団の棟梁でありながら貴族としての嗜みをわきまえた智恵者で、武家として初めて昇殿を許されるような人物だった。そして越前守になったことが、平家の栄華を生む日宋貿易に関与した引き金となった。当時の日宋貿易は九州大宰府が直轄していたが、もう一つ私貿易として日本海ルートがあり、その本拠地が越前国の若狭で、ここで平家は巨万の富を獲得できる日宋貿易の仕組みを学んだのである。さらに彼は1127年に備前守となり瀬戸内海の内海にも進出するのだが、当時の瀬戸内海は海賊が跋扈して年貢の運搬にも支障をきたしていたため、彼は勅命により海賊を討伐して名声を高めただけでなく、彼らを郎党として取り込んで行った。

このような背景で清盛が安芸守になったわけだが、彼がすぐに安芸国にやって来たわけではない。国司が自ら地方に出向くことはなく、彼は京都六波羅にあった平家屋敷にいて、国司に仕える地方の豪族が京都まで出かけて年貢納付や献納した。当然のことながら、この佐伯の地の権力者として厳島神社の荘園と国司の統治下にある国衙領を管理していた佐伯頼信は地元国司である清盛のもとに頻繁に出かけ、目的を達するため関係を深めていったようだ。そのとき、瀬戸内海の水軍を率いると共に、日宋貿易のみならず世界とのつながりを強めたい平清盛にとって、自身の支配下にある航海安全の神を祀る厳島神社は重要度の高い存在だったに違いない。

さらに頼信が神社再建を実現するため清盛をその気にさせる殺し文句だったと思われるものが『平家物語』の中にある。これは平家滅亡後の鎌倉時代になって作られたものだが、当時の人達の機微がよく描かれている。それは清盛が安芸守のとき鳥羽上皇から落雷で消失した高野山の大塔再建の建立奉行を命じられた話である。1156年に完成して清盛が高野山にでかけ奥の院に参拝した時、どこからともなく老僧が現れ、“越前の敦賀にある気比神宮と安芸の厳島神社は、金剛と胎蔵両界の垂迹(スイジャク)である。しかし、気比神宮は栄えているのに厳島神社は長く荒廃している。この機会に厳島神社を修理すれば、官位が天下に並ぶ者がなくなるに違いない”と清盛に告げて消えたというのだ。

この逸話は実に良く出来ている。清盛の大塔再建は史実だが、消えた老僧というのは高野山を開いた空海が連想されるが、400年近く前の人である。しかし空海は遣唐使から帰って都に戻る前、宮島にやって来て弥山を開山したという厳島神社とは浅からぬ関係にある。さらに気比神宮を持ち出したところが絶妙で、ここは清盛の父平忠盛が国司を務めた越前にあり、日宋貿易など日本海の航海の守り神なのだ。清盛の父に対する対抗心をくすぐる殺し文句だったに違いない。

### 3. 神社再建に向けて

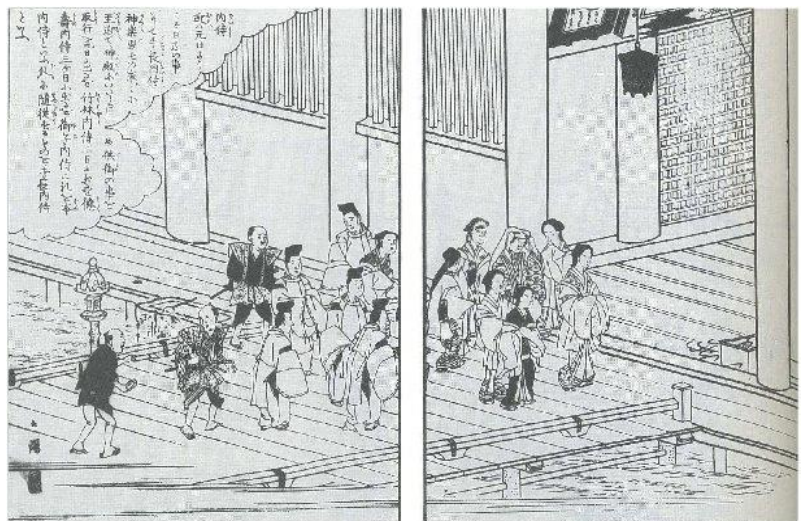
清盛が高野山に参詣した3ヵ月後に保元の乱が発生する。これは朝廷内の勢力争いであるが、結果として源氏平氏といった武士の台頭を決定付けた。これにより清盛は播磨守と太宰大貳に就き、瀬戸内海航路を使った日宋貿易のさらなる拡大実現に動き出したのである。さらに翌1159年に平治の乱が起こり、この最初の源平合戦に勝利を収めたことにより、清盛の瀬戸内海航路による海外進出の思いは固まったと考えていい。翌1160年、清盛は初めての厳島神社参詣を執り行うのである。

この頃になると成人になった佐伯景弘が父頼信と共に接待したと思われるが、この父子が念願の神社再建への確実な第一ステップを迎え、貴賓を迎える準備は大変だったろうと思われる。当時宮島は神の島として居住は許されなかったから、対岸に宿泊することになるが、神主家の屋敷といっても都に比べ貧相なものだったに違いない。地域総動員のもてなしがおこなわれたのだろう。

ところで清盛がやって来た4年後、厳島内侍との間に御子姫君とよばれる女兒が生まれたとされている。彼女は母親譲りの美貌で後に後白河院へ入内したといわれている。この“内侍”を広辞苑で調べてみると、律令制で内侍司の女官、斎宮寮の女官、との意味に加えて安芸の厳島神社に奉仕した巫女とある。すなわち厳島内侍と呼ぶ厳島神社に特有の役割をもった女官が存在したのだ。

『山槐記』という内大臣もした中山忠親という人が1151年から1194年にわたって書いた日記があるが、

この中に京の都に“伊都岐島(厳島)別宮”なるものが清盛の邸宅を含めて3箇所もあり、神楽や誦経、祈祷などが行われ、内侍と呼ぶ巫女が神事や舞を見せるなどしていたとの記述がある。どうも佐伯景弘は都の公達を、内侍を使って京の別宮で厳島神社のPRに努めたようだ。これは想像だが、清盛が



高野山で聞いた老僧のお告げも、佐伯景弘が厳島内侍を通して伝えていたのかもしれない。

さらに清盛と厳島内侍の子供が生まれたと同じ1164年、清盛は一門32人と一緒に厳島神社に参詣し有名な『平家納経』の奉納式が行われた。これは清盛・重盛・頼盛・教盛など平家の有力な面々が分担して法華経を写経したもので、その表装や装飾は当時の最高の技術と材料が金に糸目をつけず使われており、平家の栄華の一端を示している。平家納経は、清盛が建てた新しい海上神殿に奉納されたように思われがちだが、年代からすると創建以来の古い社殿に供えられたのである。

この平家納経とちょうど同じ頃、それまで博多止まりだった宋からの貿易船を今の神戸まで呼び寄せることを狙って、現在の神戸港である大輪田泊の整備を始めている。工事はいろんな困難があったようだが、初めて宋船が来航したのは1170年のことだった。

納経の3年後の1167年に清盛は太政大臣という最高位に就いている。このような状況から当時すでに清盛は厳島神社建設を決心していたのだろう。

#### 4. 厳島神社の建設

こうして清盛は最盛の時を迎えるのだが、1168年急に熱病にかかったため出家するというハプニングが起こるものの、その年の末に厳島神社の大改修が決定される。これに関する文書は景弘が太政官に上申した公文書である『伊都岐島社神主佐伯景弘解』が残っているのみである。解というのは、建設許可願いのようなもので、改築の内容、手順、日程や将来の修理の方策まで書かれている。要するに建設主体は神主である佐伯景弘であるが、必要な資金については平清盛が全額保障したということだろう。当時宮大工を始めとする建築技術者や職人、さらに土木工事技術者などすべて都の近辺にしかいなかったはずで、その要員から現地での食料宿舎までの手配が必要だった。特に神社を海上に建設することから、数十年毎に発生するといわれる土石流対策も必要で、それは膨大な費用だったろう。

この一大プロジェクトが佐伯景弘の指揮の元で展開されたわけで、この佐伯の地は中央からの技術や情報により大いに活性化したはずである。たとえば当時やって来た鋳物師が残した技術により、その後永く対岸の廿日市は鋳物産地となった。

佐伯景弘の政治工作の目標は厳島神社の建て替えであったが、この神社建設は佐伯神主家と平家の強い繋がりを広く世間に知らしめ、瀬戸内海沿岸における存在感を一気に拡大したと思われる。当時豪族の多くが神主家の荘園として自分の領地を寄進したということからもそれが分かる。

ところで当時の状況を偲ばせる祭礼が現存していることはあまり知られていない。一般に祭に使われる山車(ダシ)には車輪により曳くものと神輿のように担ぐものがある。京都祇園祭の山鉾や岸和田のだんじりが前者の代表で、担ぐものは太鼓台とかちよさと呼ばれ瀬戸内沿岸を中心に現在でも各地で使われている。そしてこの太鼓台の飾り幕には色んな絵が刺繍などで描かれているのだが、その中



佐伯景弘 新居浜船木神社元船木太鼓台飾り絵  
新居浜祭 HP 田神館

で愛媛県新居浜市、香川県観音寺市、兵庫県洲本市旧五色町(淡路)、朝来市生野町、加西市北条などの飾り幕には平清盛と共に佐伯景弘の武者絵が描かれているのだ。この経緯については不明であるが、清盛をバックに持った佐伯景弘の勢力が広い地域に及んでおり、彼が神主であると同時に武家として平家の水軍の一翼を担っていたことが窺える。

## 5. 厳島神社への招待作戦

『佐伯景弘解』が提出されたのは1168年だが、この大工事は完成までには数年かかったであろう。厳島神社の完成により景弘の目的の第一歩は達成したが、彼はそれだけでは満足しなかったのだろう、京都の皇族や貴族などVIPを宮島に招くことで、さらに厳島神社の認知度を高め、神主家自身の栄達をもはかったのだ。

神社改築が完成した直後と思われる1174年、当時の最高の権力者である後白河法皇とその妃で清盛の妻時子の妹滋子である建春門院の厳島行幸を実現させた。天皇や上皇が妃を連れて遠方、それも船で片道1週間もかかるような旅行をすることは嘗てなかったことで、法皇と清盛の関係もあるが、景弘がいかに信頼されていたかが分かる。この時の船旅は宗の貿易船が使われたとされ、厳島内侍が付きっきりで接待したという。

1177年にはさらに大きなイベントが執り行われた。この時の様子は『伊都岐嶋千僧供養日記』に記されているが、60歳になった清盛を始め平家一門が出席する千僧供養や万燈会を催したのである。千僧供養とはその名のとおり、僧千人が回廊に並んで行う祭事で、想像するだけで壮大な儀式ではある。神社でこのような仏教儀式が行われたことに違和感があるが、1168年に出家して天台宗の僧になっていた清盛の意向により天台方式で儀式が行われ、それは現在でも継続されているという。

1180年に清盛の娘婿である高倉天皇が退位し上皇になるとすぐ、周囲の心配をよそに厳島参拝に出かけた。これは同行した土御門通親が著した『高倉院厳島御幸記』に詳しく書かれているが、この時も景弘の綿密な計画により進められたようで、船旅での内侍による田楽や神楽、万歳楽はもちろん、到着してからも例えば、七浦巡り、瀧宮での歌会、大聖院の横の白糸の滝見物、藤の花の見物などで一行を多いに楽しませた。景弘はこの行幸における接待の功で官位昇格を獲得している。

このように都から大勢の賓客を迎えたわけだが、最初いやいやながらやって来た貴族たちも、海に浮かぶ華麗な社殿や壮大な儀式を見るにつけ、すっかり満足して帰ったという。さらに彼らを満足させたのが厳島内侍の接待である。昼間に儀式を執り行い舞などで楽しませるだけでなく、夜の接待でも深く印象付けたようだ。『伊都岐嶋千僧供養日記』にもいろんな内侍の品定めがでていいる。また徳大寺大納言藤原実定と寵愛した有子内侍の悲恋物語も語り継がれている。

この内侍たちは都のやんごとなき人達を相手にするわけで、美貌だけでなく相当の教養が求められたはずである。景弘はそのために京都の別宮をフル活用して人材発掘や教育訓練を行ったのだろう。こうして中央との太いパイプを確保した厳島内侍は、江戸時代までその力を堅持し、宮島内での発言力を持ち続けたといわれる。

このイベントを行うにあたり景弘が必要としたことは、数千人規模の人員や物資を都から片道1週間もかかる運搬を企画し、宮島近隣での宿泊施設の建設、食料の調達や調理、各階層向けの遊覧企画など膨大な計画と実施という総合的プロデュースだった。そしてこれには膨大な金や労役が使われたことになり、この地域の住民や産業従事者は多いに活性化したに違いない。

## 6. 平家滅亡と景弘

このようにして平家は栄華の頂点に達するが、行幸の翌年に高倉上皇が20歳で早世し、その直後に清盛が62歳で亡くなってしまふ。清盛という司令塔をなくした平家は、源氏の攻勢に対し後退を余儀なくされ、1185年の屋島の戦いで負けると、味方をしてくれるはずの北九州に落ち延びたが期待通りにならず、ついに壇ノ浦の戦いで幕を閉じてしまふ。

この期に及んでもその真価を最大限発揮したのが佐伯景弘である。景弘は平家側の武将として壇ノ浦に息子の景信とともに参戦していたのだから、当然源氏からの咎めがあっても不思議でない。ところが彼は壇ノ浦の海戦の折、安徳天皇が持っていたとされる三種の神器の一つ、天叢雲剣(アマムラクモツギ)が水没紛失したため、それを探す役目を引き受けることに成功する。しかも1年以上かけても宝剣は見つからないままやむやにして、ついには源頼朝の厳島神社への信仰心を煽り、生き残ることに成功するのだ。もし景弘のこのような行動がなければ、平家の信仰を集めた厳島神社は取り潰しにあってもおかしくなく、彼のしたたかさのお陰で厳島神社が残されたのである。

### おわりに——佐伯景弘に学ぶ地域おこし

このように佐伯景弘は、当時の政治情勢に振り回されながらも波乱万丈の活躍で自分の野望を満たし、現在残っている海上の朱の厳島神社回廊の建設と後世への継承を成功させたのである。いま我々は彼が残してくれた遺産を最大限活用して、この地を豊かで幸せな街にすべく行動することが、景弘の恩に対する報いであるとともに、後世に対する義務ではないだろうか。

そのためには彼が残した厳島神社というハードの活用のみならず、彼の行動から学ぶべきソフトの部分も生かさねばならない。それは、将来を見通した戦略的行動であり、多くの人達をまとめて動かすリーダーシップ、さらにおもてなしの心などであろう。この郷土の大恩人、佐伯景弘をより多くの人が知り、彼の思いを理解することが、この佐伯の地の発展につながるものと考えるのである。

#### 参考文献

『広島県史』 広島県 昭和55～59年。

『宮島町史』 宮島町 平成4年3月。

岡田清 『厳島図会』 世並屋伊兵衛 天保13年(1842)。

大地徳子 『厳島神社の内侍(公開講座資料)』 県立広島大学宮島学センター 2010年2月3日。

作者不詳 『伊都岐嶋千僧供養日記』 1177年。

---

#### 木本 泉 (きもと・いずみ)

1942年、広島市生まれ。広島大学工学部卒、1965年東洋工業(現マツダ)入社、88年マツダ R&D ノースアメリカVP、開発主査、96年退職、ベバストジャパン開発担当役員、2009年退職、元宮島口自治会会長、廿日市市文化協会理事、かみきど倶楽部代表。